CARE World

Vol. 8 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter February 2008

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1 アフリカにおいて新規事業を実施します！ ～「レソト」を訪問して

page 3 新規事業紹介
ベトナム「HIV/AIDSと人権プロジェクト」
カンボジア「ココン州青年男女の能力向上プロジェクト」

page 4 事務局からの報告
立教大学において事務局長が講演を行いました
JICA地球ひろばにおいて展示会を開催 ほか

page 6 インドネシア・ジャワ島中部地震被災者支援 ～現地から最新報告

page 7 カンボジア
「コミュニティのための人材育成事業」終了報告
私スタイルのCAREライフ
CAREボランティアメンバー 篠崎 典子

page 8 CAREストーリー ～バングラデシュ
「幸運の喪失と発見」
CARE Notice Board

アフリカにおいて新規事業を実施します！
～「レソト」を訪問して～

■「天空の王国」。こんな国がアフリカにあるとは、多くの人は知らないかもしれません。

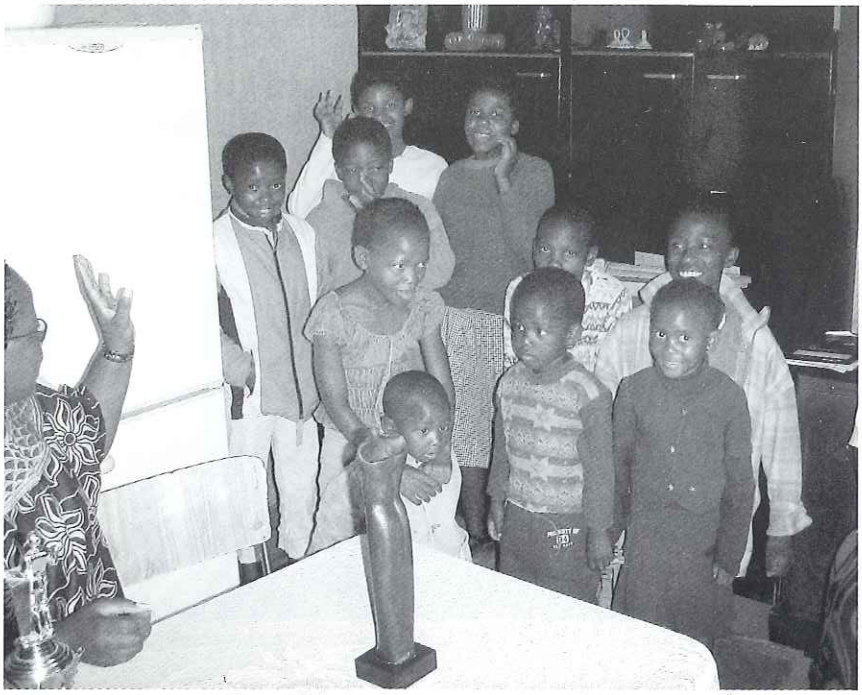
これは「レソト」というアフリカの南にある本当に小さな王国のことです。すべての国土が標高1,300m以上という山岳地域です。実際にレソトでは、雲がつかめるような気がするほど、空を近くに感じられます。また、アフリカの大国、南アフリカ共和国(以下、南ア)に360℃囲まれているという世界でも珍しい国境線を持つ国でもあります。どこに行くにも南アを通らなければ、他の国には行くことができないのです。世界地図が近くにあったら、ちょっと探してみてください。レソト、スワジランド、ボツワナは、南アに編入されていてもおかしくないといわれている国々です。しかし、歴史のいたずらは、今のような国境線を引いてしまいました。

■こんな不思議なレソト王国(以下、レソト)の基本情報をまずお話しましょう。

面積は3万平方キロ(九州より若干小さい)。人口は188万人(2006年調査)で民族はバソト族。大部分がキリスト教徒です。言語は英語(公用語)とソト語(「レソト」はソト語を話す人の意)が使われています。首都は小さな町マセル。国の主要産業は農業と牧畜業で、通貨はロチ(1ロチ＝約18円。南ア通貨のランドと等価)。緑が映える美しい山々ときれいな川は、ヨーロッパからの観光客を魅了しています。安全面で危険な国の多いアフリカにあって、とても平和で治安のいい国です。世界でも最も治安の悪い都市となってしまった南アのヨハネスブルグからの渡航者は、マセルの国際空港に降り立つとホッとするそうです。空港ものどかな雰囲気の空港なので、余計安ど感を感じさせるのでしょう。

■ではこの一見平和な国では何が問題なのでしょう。

まず、HIV/エイズの問題が大変深刻となってきており、危機的状況にあります。HIV感染率は23%もあり、世界でも3番目に高い数値となっています。実際、村に行ってみると、「近所の人たちがどんどん亡くなっていきます」という話を聞きます。同時に、HIV/エイズで親を失った孤児が増えており、その数は現在8万人と見られています。レソトでは孤児院が少なく、伝統的に親類縁者や隣人が子どもたちの世話をしています。ある村に行きましたが、本当に孤児が多いのに驚きました。(p.2に続く)



レソトのマセル県Phomolong村のエイズ孤児の子どもたち。CAREレソトがサポートする現地NGO"Phomolong Support Group"が子どもたちに対する支援活動を行っている。写真は、同NGOの事務所にて

孤児を抱えるお宅を何軒か訪問しましたが、孤児３人だけの家庭もありました。お兄ちゃんが世帯主で、妹二人が一緒に住んでいます。寂しい目をした男の子でした。親類縁者などの保護者がいる孤児たちとは、明らかに違う苦しさが伝わってきました。村の有志がボランティアでこのような孤児を助けており、何とか生活しています。エイズは小さな村々までまん延し、家庭を崩壊し、子どもたちの未来をもむしばんでいます。

■エイズにより弱っている人々と村を、昨年の冬(南半球のレソトでは夏)に過去30年で最悪の大干ばつが襲いました。

レソトでは、年間降雨量の85%が雨季である10月から３月に降り、主要作物であるメイズ(白とうもろこし)に恵みを与えます。そして、４月から５月に収穫を迎えます。しかし昨年は、１月から３月まで日照りと高温が続き、メイズが育ちませんでした。食糧危機により、人口の３分の１にあたる約50万人が被害を受けています。政府は、昨年７月に食糧危機を宣言し、国連も緊急アピールを発表しました。

普通の人でも過酷な状況ですが、エイズ感染者、妊産婦、授乳中の女性、孤児といった被害を受けやすく、脆弱な人々は最も危機的状況にさらされています。栄養状態を見る指標として、低体重、慢性的栄養失調、急性的栄養失調というものがありますが、干ばつ後の指標を取ると、どれも悪化しています。緊急支援を行う必要がありますが、通常の緊急支援とは別のアプローチが求められています。

災害にはいろいろな種類があり、人道支援では、大きく２つに分けています。地震、津波、台風、豪雨、洪水、地すべりなどの急に被害をもたらす災害と、干ばつなどゆっくりと被害を及ぼす災害です。後者は、次期の農作への支援(種子の配布など)や早期回復のための支援など、半年や一年先に被災者に支援が届くような支援をしなければなりません。ただ、その被害が目に見えにくく、じわじわと悪影響を及ぼすため、メディアや支援者の関心・理解を得るのが大変難しいのです。

政府と支援機関による食糧配布は行われていますが、主食のメイズに偏っており、人々の栄養状態は改善されていません。また、アクセスの悪い山岳地においては支援機関の緊急支援が十分に届いていない状況です。さらに、コミュニティの回復力を早期に高めることにも支援が及んでいません。そこで、ケア・インターナショナル ジャパンでは、支援の届いていない山岳地において、脆弱層の家庭(主にHIV/エイズ感染者の家族を支える女性や未亡人、エイズ孤児が世帯主となっている家庭)を対象に家庭菜園支援事業と栄養改善事業を実施することになりました。

菜園には円形菜園と地表型菜園があり、写真は円形菜園の様子。身の回りにある石や土などで作れることから、各家庭に広まりつつある

これまでに、CAREの現地事務所(CAREレソト)では、各家庭が菜園を自分たちで作り、農作物を手軽に収穫できるように支援してきました。身近にある石で周りを囲い、家畜の糞(ふん)・サボテン・灰などを天然肥料として土壌を作ります。これらの菜園で、にんじんやセロリなど５種類くらいの作物ができるよう、コミュニティの中から選ばれたボランティアさんが指導します。コミュニティ・ボランティアは、CAREが実施する研修を通して農業普及員となり、各支援家庭を回って、指導にあたります。本来、農業普及員は政府職員がするものですが、政府の予算や人材不足からコミュニティが補完するしかない状況になっています。この家庭菜園、誰でも簡単に作れることから、支援されている家庭で成功すると、近所の人たちが真似をしてどんどん周辺家庭に広がっていきます。村々を車で移動中、緑が美しい家庭菜園を持つ家庭を実にたくさん見かけました。

■ケア・インターナショナル ジャパンでは、この家庭菜園を広げるための活動を支援すると同時に、コミュニティ・ボランティアが住民に対して研修などを行う栄養改善事業を実施します。

さらにその後、HIV/エイズ関連事業も予定しており、今後、多くの支援が必要とされています。この度、ジャパン・プラットフォーム（JPF）からの資金協力を得て、レソトにおけるプロジェクトを実施することができることになりましたが、一部の活動のための資金が約400万円ほど不足しています。私たちの支援が、エイズで苦しむレソトの社会を勇気づけ、自然災害にも立ち向かうことのできる社会へと変えていくことができるよう、皆様からのご理解・ご支援をお願いいたします（ご支援いただけます方は、詳細について当団体ホームページのレソト関連ページをご覧ください)。　　（事業部　武田 勝彦）

■新規事業紹介

ベトナム
「HIV/AIDSと人権プロジェクト」

活動期間：2007年５月～2008年６月(全体で３年間を予定)
地　　域：ベトナム社会主義共和国ハノイ市、ホーチミン市、クアン・ニン県
対 象 者：HIV陽性者、医療従事者、政策策定者
主支援者：郵便貯金・簡易生命保険管理機構(国際ボランティア貯金)、一般寄付

■背景

HIV陽性者が感染による健康状態の悪化によって弱者となるだけでなく、社会・経済的差別を受けている現状は、HIV/エイズの予防と治療に取り組む際に、大きな障害となっています。HIV/エイズのまん延を防ぐためには、正しい知識を広め、適切な政策に基づく対策と支援が行われる必要があります。

CAREは1994年以降、ベトナムでHIV/エイズの問題に取り組んでおり、HIV/エイズ予防、心のケア、栄養改善、カウンセリング、HIV/エイズ孤児への支援などさまざまな活動を行ってきました。しかし、ベトナムではいまだにHIV/エイズを社会悪(Social Evil)ととらえる傾向にあり、政策策定者や医療従事者に対するインタビューからも、HIV/エイズ陽性者に対する差別と偏見が浮き彫りになりました。

■活動内容　～３つの対象グループへのアプローチ

このプロジェクトでは、HIV陽性者自身の活動を軸として医療従事者と政策策定者の意識向上をはかり、HIV陽性者に対する正しい理解が深まることを目標としています。

プロジェクト終了時には、HIV陽性者、医療従事者、政策策定者の３つの対象グループの人々における、以下の変化を目指します。

- ●コミュニティに根ざしたHIV陽性者自助グループが、自ら差別や偏見の現状を理解してもらうための行動を起こせるようになる。
- ●医療従事者が、患者の個人情報についての守秘義務を守り、HIV陽性者に質の高いケアを提供し、医療現場において差別や偏見のない行動がとれるようになる。
- ●政策策定者が、HIV陽性者に対する差別や偏見について正しく認識し、政策に反映できるようになる。

上記のことを達成するために、HIV陽性者自助グループによる自主的な活動、医療従事者とHIV陽性者間の対話ワークショップの開催、人権とHIV/エイズに関するガイドラインの開発と政策策定者に対する配布などの活動を行います。HIV陽性者に対する差別や偏見がなくなる社会に向けて３つの対象グループへの働きかけを同時に行い、関係を構築・強化することで、最大限の効果を目指します。

カンボジア
「ココン州青年男女の能力向上プロジェクト」

活動期間：2007年12月～2008年６月(全体で31カ月を予定)
地　　域：カンボジア王国ココン州スマッ・ミンチェイ、ボトゥン・サコー
対 象 者：青年期の男女1200名
主支援者：外務省(NGO連携無償)、ケア・フレンズ東京、ケア・フレンズ岡山、ケア・フレンズ札幌

■背景　～ココン州の状況

対象地であるココン州は、カンボジア西南沿岸部のタイ国境近くに位置し、首都プノンペンから遠く離れているため、公共サービスが行き届かず、カンボジアの中でも特に厳しい貧困に直面しています。多くの青年期の男女、特に女子は教育を受ける機会に恵まれず、生計を立てるのに必要なスキルを持たないなどの問題を抱えており、人身売買や売春・ドラッグなどの被害者となったり、HIV/エイズなどの感染のリスクにさらされています。

■活動内容

このプロジェクトでは、青年期の男女、特に上記のリスクに対して最も脆弱な12～24歳の女子を中心に、彼らが危険から身を守り、生計を立てていくために必要な識字能力や生活知識・ノウハウを身につけられるよう支援していきます。

また、青年期の男女に対するコミュニティや行政関係者たちの理解を深めるために、ジェンダーや平等な参加に関するトレーニングを実施し、意識の向上を図るともに、「HIV/エイズ」や「環境」などのコミュニティに共通する問題を扱ったワークショップを通じて、青年男女とコミュニティの協力関係を強化していく予定です。

昨年12月末に、日本人駐在員が赴任しました。今後、具体的な活動内容について、現地から報告します。

プロジェクトのオリエンテーションに参加し、スタッフの説明に熱心に聞き入る女の子たち

事務局からの報告

立教大学において事務局長が講演を行いました

アイセック立教大学委員会の依頼を受け、昨年11月27日に開催された立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科主催の公開講演会、「CSR活動の今～企業とNPOのコラボレーションの可能性～」に事務局長が参加しました。

CSRについての体系的な話、各企業のCSRの取り組みとCAREの企業パートナーシップ事例の紹介に続き、当団体事務局長が三菱地所株式会社およびサントリー株式会社次世代研究所の方とパネルディスカッションに加わりました。NGOと企業が協力関係を構築・強化していく際には、組織同士のビジョンや方針の一致だけでなく、担当者同士の理解と信頼が深まる必要がある、パートナーシップの「成果」を両者で確認をしていくことが重要である反面、これを一つの「プロセス」として考え、長期的な視野を持って辛抱強く関係を育んでいくことも大切である、などとても活発なディスカッションとなりました。学生や研究者、企業のCSR担当者などを含む70名ほどの受講者は、苦労話や具体的な事例についての説明に熱心に耳を傾けていました。

JICA地球ひろばにおいて展示会を開催／連続セミナーにて事務局長が講演

JICA地球ひろばが「ジェンダー」をテーマに実施した企画の一つとして、CAREは1月4日～1月20日まで、展示会「女性を取り巻く世界と、国際NGO・CAREが支える女性たち」を開催しました。途上国の女性が直面する問題やそれに対するCAREの取り組みについて説明したパネルを展示する

とともに、CAREが支援する女性の写真やストーリーを通して、さまざまな場面で不利な立場に置かれる女性たちがCAREの活動に参加し、力強く生きる姿を紹介しました。

展示期間中、多くの方が来場してくださり、年始早々や仕事帰りの遅い時間帯に足を運んでくださった方もいました。来場者からは、「いろいろな国の女性のパワーを感じ、自分も頑張ろうと勇気づけられました！」「CAREの女性支援について、海外での活動がよく理解できた」「一つ一つの写真がきれいでした。美しい」などのコメントをいただきました。

また、JICA地球ひろばで1月30日に開催された連続セミナー「一人ひとりが生きやすい社会へ！～女性のエンパワーメントの様々な取り組み～」にて当団体事務局長が講演し、カンボジアにおける女子教育事業の事例について話をしました。平日の夜の開催でしたが、仕事帰りなどに立ち寄り、熱心にメモをとりながら聞いていらっしゃる来場者の方の姿が多く見られました。JICA地球ひろばが実施したアンケートには、「ジェンダーは女性のためのようなイメージがあったけれど、そうではないということに気づけた」「現場の状況を詳しく知ることができ、大変参考になりました。ジェンダーは男女共に取り組むことが大切であるというお話が印象に残りました」などのコメントが寄せられ、参加者一人ひとりが「ジェンダー」について新たな視点から考えるきっかけを得られたようです。

展示会およびセミナーにお越しいただきました皆様、ありがとうございました。また、展示会開催にあたり会場スペースの提供および準備段階から開催期間中のサポートなど多大なるご協力をいただきましたJICA地球ひろばの皆様、またセミナーでの講演にあたりお世話になりましたJICA企画・調整部ジェンダー・環境社会配慮審査グループ ジェンダー平等推進チームの皆様に紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

ケア・サポーターズクラブ熊本講演会

ケア・サポーターズクラブ熊本の講演会が1月26日に行われました。当日、熊本の産業文化会館は、講師の林真理子さんに一目お会いしたい、講演を聞いてみたい、という女性で溢れ、大変な熱気に包まれました。ご主人が熊本のご出身ということを知り、遠く離れた著名人としてみていらした700人以上の来場者は、林氏に対して親近感を持たれたようです。

「私の描いた女達」というタイトルの講演では、波乱万丈の人生を送る主人公の女性の人物像が描かれるまでを、個人的な出会いや体験をもとにお話くださいました。また、作家としての仕事と、一人の妻・母親としての役割の両立についてのお話は、多くの女性の共感を呼んだようです。

講演会を通して、ケア・サポーターズクラブ熊本の皆様には、多額のご寄付をいただきました。紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

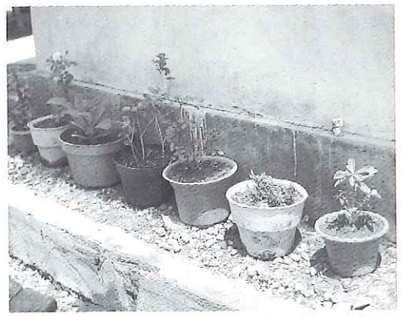
神戸市「ひょうご国際プラザ」において展示会を開催

(財)兵庫県国際交流協会のご協力を得て、1月23日～2月12日まで、展示会「『ケア・パッケージ』から始まった国際協力NGO、CAREの活動の昔と今」を開催しました。

会場には、60年前に配布されたケア・パッケージとサンプル物資、当時の写真などを展示し、CAREの歴史を紹介するとともに、ベトナム、カンボジアなどで実施中の開発支援事業、パキスタン洪水緊急支援事業、企業とのパートナーシップ事業などについて説明したパネルと写真を展示し、CAREの「今」を来場者に見ていただきました。

会場スペースの提供およびパネルなどの展示、開催期間中のサポートなど多大なるご協力をいただきました(財)兵庫県国際交流協会の皆様に紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

ラジオ局にて。防災などに関する知識普及のための番組に、現地NGOスタッフが出演している



新しい家のポーチに鉢植えなどを置いてきれいに飾っている家も見られる

インドネシア・ジャワ島中部地震被災者支援

～現地から最新報告～

2006年５月にインドネシア・ジャワ島中部を襲った地震から、もうすぐ２年が経ちます。CAREは、感染症などのリスクを避けるための安全な飲料水の確保や保健衛生の知識向上のための活動、被災地周辺のマーケットと連携した地域経済活性化の取り組みなど、さまざまな緊急・復興支援活動を展開してきました。家屋の建設・修復のための活動では、CAREは現地の建設作業員などに耐震工法についてのトレーニングを行い、建設作業員が住民のための住居建設を無償で行うよう手配しました。一方、住民たちは高度な技術を必要としない労働を提供することで、自らの住居や生活の再建に関わりました。

今回、新しい家に住んでいる家庭を訪ねることができました。ある女性は、唯一の収入源である農作業の合間を縫って建設作業に参加し、６カ月かけて家を完成させ、また大家族のある人はCAREの支援と政府の支援を合わせることで、大きい家を建てることができました。それぞれが、「CAREの支援なしにこの家は建てられなかった」と話してくれたり、ただ嬉しそうに笑って「ありがとう」と手をぎゅっと握ってくれたりしました。さらに、壁に色を塗ったり、床にタイルを張るなど、より快適に暮らすための工夫や改良をしている人々の姿も見られました。支援の必要な「かわいそうな人たち」ではなく、非常に明るく前向きに生きる人々の力強い姿に、話を聞いている私自身が元気づけられる思いでした。

しかし、新たな家が完成したものの、地震で崩れるコンクリートが頭に焼きつき、「コンクリートの家には住めない」と、今も敷地内にある簡素な仮設住宅に住んでいる人もいました。建物の修復とは異なり、目に見えない傷は、２年という時間を経た今も癒えることはなく、このようなトラウマを抱えた人が大勢いることも事実です。地震のような自然災害において、物質的支援も重要ですが、現地の人々が生活を再建し、自立していくためには、こうした目に見えない部分に対する支援もとても大切だということを改めて感じました。

住宅建設のほか、個別訪問やコミュニティでのワークショップなどを通して防災や建物の耐震性に関する知識を広める活動を、パートナーNGOのKOMPIPが継続的に実施しています。その一環として、同NGOのスタッフが、地元のラジオ局と協力し、隔週で１時間ほどの番組を組んで情報提供をしています。この番組にはKOMPIPの若手スタッフが毎回出演しており、彼ら自身が自分たちの言葉で一般市民に対して防災のメッセージを伝える能力を高める良い機会になっています。

また、CAREの住宅再建支援に携わった女性たちの中から職人を養成するという試みが始まろうとしています。これまでは伝統的に女性が簡単な作業を手伝うことはあっても、職人になることはありませんでした。しかし、被災後の住宅再建支援に携わった女性たちは、職人の需要が高いこと、また収入向上への道が開けることに気づき、職人としての技能を身につけることに非常に意欲的です。今後、この女性たちは、KOMPIPを通じてトレーニングを受け、職人として独り立ちすることを目指しています。

自然災害の頻発するインドネシアにおいて、人々が防災について学び、また地震で被災したことをきっかけに自立の道を探る姿を見て、本来、人が持つ生きていくための力強さを改めて感じました。彼らのこうした努力が実を結び、さらに発展していくことを願います。

（マーケティング部　貝原塚 二葉）

新しく建てられた家と、その家に住む女性

カンボジア

コミュニティのための人材育成事業（女子教育奨学制度事業Ⅱ）終了報告

■基本情報
活動期間：　2004年10月～2007年９月（３年間）
地　　域：　カンボジア王国カンダール州ルックダイク地区
対 象 者：　女子教育奨学制度事業で高校に進学した奨学生
支 援 者：　ケア・フレンズ岡山、ケア・フレンズ東京

■地域と共に運営する奨学事業

この事業は、前事業の「女子教育奨学制度事業」において中学課程を修了し、高校に進学した奨学生が、高校を修了するだけではなく、コミュニティの発展に役立つ知識や技能を習得し、コミュニティに貢献できる人材となることを目的として活動を行いました。

奨学生や関係者が集まった事業終了式にて

経済的・文化的な理由から、女子は家事や家業を手伝わなければならず、多くの女子が学校に通えないという環境の中、この事業での活動を進めていくにはコミュニティの理解と支えが不可欠でした。そこで、奨学生の親やコミュニティの人々、そして親や教師・地区代表などから構成される奨学制度運営委員会が、自ら奨学制度を運営することで、女子教育の重要性やジェンダーへの理解を深めてもらうことを狙いとしました。

■大きな成果

奨学制度運営委員会は、奨学生の学業や出欠のフォロー・補習授業の実施などさまざまな場面で積極的に奨学生をサポートし、家族やコミュニティの理解が深まりました。また、学校とコミュニティの密な連携が構築され、奨学生の出席率やクラスでのパフォーマンスの改善につながりました。

奨学生は、ジェンダーやＨＩＶ/エイズなどの問題点を自ら分析し、コミュニティに対するワークショップを運営することで、状況分析・問題解決力を高め、自立心と積極性を養いました。人前で、あるいは目上の人に対してしっかりと説明をする奨学生の姿は、女性リーダーが少ないコミュニティにおいて同世代の模範となりました。

奨学生が知識と能力を身につけたことで、彼女たちに対するコミュニティの意識と態度も変化しました。例えば、カンボジアでは若者の意見が聞かれることが少ないのですが、コミュニティでは人々が奨学生の意見を求め、発言に耳を傾けるようになりました。

■事業終了にあたって

奨学生はコミュニティの理解と支援により、高校を無事に卒業しました。CAREは今後も、コミュニティの人々が理解を深め、自らが運営していく枠組みを用いながら支援を続けていきます。

＊これまでご支援いただきましたケア・フレンズ岡山とケア・フレンズ東京の皆様に心よりお礼申し上げます。なお、今後も継続してカンボジアにおける事業（本誌３ページに記載）を支援していただくことになりました。心より感謝いたします。

（事業部　竹中 宏美）

私スタイルのCAREライフ

CAREボランティアメンバー
篠崎 典子

デザインのみでなく、イベントなどさまざまな機会にもお手伝いしてくれる篠崎さん。写真は、昨年６月に開催されたチャリティーサッカーの会場にて。来場者に募金協力を呼びかける（左が筆者）

私がCAREのボランティアとして登録したのは、約１年半前の26歳のときです。それまで、世界で起こっている貧困などの問題やボランティアについて知っていても無関心でしたが、25歳の時に行ったカンボジアとベトナムへの旅が、今、私がボランティアを始める大きなきっかけとなりました。

テレビで見たことはあっても、目の前の地雷で手足がない多くの子どもたちの必死な物乞いの姿がとても衝撃的でした。同時に、私の中で「親や国は、何も悪くない子どもになぜここまでさせておくのか？」という思いが今まで以上に湧いてきたのです。そして、学生時代からNGOでボランティアをしている人と知り合い、「フェアトレード」を教わりました。すると、貧困が起きる原因が先進国にあり、自分がどれだけそれに関わっているのかがわかりました。何も知らないで、親や国を非難していたことを恥ずかしく思い、これからはちゃんと世界で起きていることを知り、少しでも彼らの力になりたいと強く思いました。

その後、できることから始めようとボランティア参加の機会を探していた時、CAREでニュースレターの制作ボランティアを見つけ、幸運にも自分の仕事（ＤＴＰオペレーター）でのスキルを生かせるものにすぐ出会えたので、スムーズにボランティアを始めることができました。

実際に現地で国際協力をするわけではありませんが、地道な仕事が多いNGOで働く方の力になれることが、きっと一人でも多くの子どもや女性の未来が明るくなることへつながると信じています。これからもできる限り続け、私が楽しそうにボランティアをしている姿を見て、誰かが自分も始めてみよう、世界について知ってみようと思ってもらえたら素敵だなと思っています。

昨年末に事務局にて開催された年末懇親会の一コマ（中央が筆者）

すべてを失ったけれど、家族が無事だったことが何よりも幸せと話すMorshedaと右は夫のKailsen

CAREストーリー
～ バングラデシュ ～

幸運の喪失と発見

文・写真：ケア・ドイツ－ルクセンブルク Sandra Bulling

＊以下のストーリーは、昨年６月にバングラデシュを襲ったサイクロン発生から５カ月ほど経った11月に、被災地にてCAREスタッフが執筆した日記の抜粋です。

ダッカのコミュニティ病院と協働してCAREが運営する巡回医療チームを訪れた。チームは現地を移動し、一日に何百人もの患者を治療している。燃えるような太陽の下で、多くの人々が治療を受けるために列を作っている。

「下痢などの症状を引き起こす水因性の病気が増えている」と、医師は私に話した。「被災者たちは、サイクロンにより汚染された池の水を飲まざるを得ないからだ」。これらの池以外にこの地域に飲料水はない。トイレや水浴び場はもちろん、水道管すらないのである。「私たちはのどが渇いている。その水を飲むべきではないことはわかっている。しかし、どうすればいいのだ」とある男性は話した。

あたりを見回していたら、小さな小屋が見えた。壁はビニールシートと毛布で覆われている。いわば、壊れたパッチワークの家である。その前で一人の女性が、大切そうに腕に小さな赤ん坊を抱えて立っていた。「サイクロンが直撃した後、私は３日間、自分の夫が死んだものと思っていました」と、彼女、Morshedaは言う。彼女の夫のKailsenは沿岸で魚の干物を作り、家族のために収入を得ていた。彼はサイクロンが来たとき、木にしがみついた。数時間後、水位が上昇し、彼はヤシの木の頂上までよじ登って行った。翌朝、彼は村に戻ることができなかった。なぜなら、暴風雨でもぎ取られ、倒れた木で道がふさがっていたからである。

その頃、彼の妻はすでに喪に服していた。３日間、彼女は辺りを無気力に歩きまわり、絶望的な気持ちで夫の遺体を捜した。するとその時、夫がゆっくりと近づいてくるのが見えた。「私はとても衝撃を受け、そして安どしました。それはもう言葉では表すことができないほどです。私は、鶏、家、収入などすべてを失ったけれど、家族が生きていること、ただそれだけで幸せです。私たちはこれからなんとか生きていかれるでしょう」。絶望の中に、小さな幸運を見つけたのである。

クルナへ戻る５時間にも及ぶ移動の間、私はずっとこの若い夫婦のことを思い出していた。美しい夕焼けを見ながら、私はより多くの人々が何らかの幸運を得られたことを望んでいた。そして、生活を続け未来を再建していくために必要な精神、強さ、そして手段を、人々が見つけることができたら、と思った。MorshedaとKailsenのように。

ケア・インターナショナル ジャパンでは、2008年2月末までバングラデシュ サイクロン「シドル」緊急募金への協力の呼びかけを行い、多くの皆様からご支援をいただきました。ご支援いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。現地での活動については、追ってご報告いたします。

CARE Notice Board

当団体発行の資料の制作について

当団体から皆様にお送りさせていただいているニュースレター、年次報告書などの資料や募金協力依頼のための郵便物は、多くの個人および企業の方からのご協力により制作・発送されています。

資料のデザイン制作については、デザインを職業とされている方がボランティアとして関わってくださっています。また、デザイン制作会社や印刷会社、発送業者においては、通常なら高額な費用が必要とされるサービスを、安価な金額にてご提供いただいています。また、完成した大量の印刷物を送るための作業を、週末の貴重な時間を使って多くのボランティアの方がお手伝いしてくださっています。

私たちの活動は、皆様からの会費やご寄付に加えて、多くの個人および企業の方のご支援・ご協力を得て成り立っています。このニュースレター『CARE World』の制作についても皆様からのご協力を得て発行することができました。多くの方からお力をいただき、CARE Worldが作られていることをスタッフ一同、常に感謝しつつ、より一層質の高い活動を行うべく尽力しています。

当団体の活動を支えていただく皆様からのご支援・ご協力の形はさまざまです。「○○のような形であれば、協力できそうだ」という個人あるいは企業の皆様がいらっしゃいましたら、当団体事務局までご連絡いただけましたら幸いです。

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.8
2008年2月29日発行（季刊）
発　行　人：野口 千歳
編　　集：菅沼 みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335　Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org